

進歩する胎児エコー検査の波紋

妊婦の殆どが受けているエコー（超音波）検査は、最近では0.1mm単位の解像度の鮮明な胎児の立体的画像が見られる。

以前に「『告知で妊婦に動揺も胎児超音波検査』の記事に接して」を掲載したが、先日この側面を取り上げた番組「胎児エコー検査～進歩の波紋～」があったので見たが、次のような事例が紹介されていた。

妊娠6ヶ月の検査で脳と消化器にトラブルが予想され、8ヶ月の時に染色体異常の可能性も指摘され、悩んだ末に中絶したが、4年立った今も他に選択肢はなかったかと悩み続けている母親の事例。

検査で染色体異常、死産の可能性を告げられたが、悩んだが「赤ちゃんは、私たちを親として選んでくれたのだから」と決意して出産したところ、赤ちゃんは何の異常もなく元気に育っている事例。

異常のある検査結果を何の詳しい説明もなくただ告げられ、「産む、産まないは女性の権利」とばかりに突き放され、戸惑いと苦悩の末に中絶した母親たちの心の傷をお互いに支え合う集いの様子。

検査でトラブルが見つかり、医師が看護師やソーシャルワーカー等とチームを組み、治療法や医療費補助などの説明等のきめ細かいケアで親の不安を取り除き支援するシステムに取り組む病院。

エコー検査は胎児の成長を見守るためのものと妊婦は思って受診するだけに、その結果から心臓疾患や染色体異常等の可能性を告げられる妊婦の苦悩は計り知れないだけに、結果を知りたいか、知りたくないかを検査前に文書で説明しアンケートを用意している病院も。

産婦人科医の間でもエコー検査結果を「どのように伝えるか、伝えないか」といった基準はなく、出産の現場は相変わらず混乱しているのが現実とか。

胎児の異常を理由に人工中絶は認められていないが、現実には妊婦の殆どが受診するエコー検査結果から中絶が増えていくのは、障害や病気のある人への差別助長に繋がりがねないだけに、エコー検査技術の更なる進歩に伴い誰もが生命倫理に向き合う可能性のある時代だけに、生命倫理との社会的議論の遅れを番組でも呈示されていた。

科学技術の進歩は「誰のための、何のためのものか」、生命倫理との議論を常に伴いながらの社会であって欲しいと願う。